

子育てどう (Do) ? プロジェクト  
～「子育てどう？」から広げる 共感と協働の輪～

第一期 活動報告書

平成 25年 8月

認定特定非営利活動法人 リヴォルヴ学校教育研究所

# 目 次

I	はじめに	1
II	2012年度活動報告	2
	1. 目的	
	2. 活動の概要	
	3. ヒアリングの主対象	
	4. ヒアリング実施までの経緯	
	5. 活動経過	
III	活動の詳細	4
	1. ヒアリングの実施について	
	2. 「子育てどう(Do)?」トークカフェの実施について	
	3. Facebookサイトの運用について	
IV	寄せられた声とその分析	12
	・住まい	
	・親子の遊び場	
	・一時保育	
	・働き方	
	・年齢と子育て	
	・お父さん	
	・シニア世代との関わり	
	・就学・小学校との連携	
	・その他(情報、産前・産後、繋がり・関わり方、幼稚園、子育て基準)	
V	おわりに	23

# I はじめに

いじめ・体罰など様々な問題が取り沙汰される中、学校では基礎学力の向上が声高に叫ばれ、授業内容の見直しが進められるなど、子ども達を取り巻く環境は大きく変化しています。これからを生きる「いばらきの子ども達」には、どのような力が求められているのでしょうか。

学校教育のグローバル化にも注目が集まっています。しかしその一方で、地域間格差はさらに広がり、7人の内1人の子どもは経済的理由から進学が困難になるなどしているといわれます。そんな中で、生涯を通じた豊かな学びを実現するには、どのような取り組みが必要とされるのでしょうか。

認定NPO法人リヴォルヴ学校教育研究所では、不登校や学習につまずきがちな子ども達の支援に取り組んでいます。子ども達がつまずいたとき、私達はその責任を安易に転嫁しがちです。しかし世の中に、完璧な人など存在し得るのでしょうか。そもそも、つまずきはマイナスとばかりに捉えるべきものなのでしょうか。試行錯誤の繰り返しの中から新たな発見が生まれるように、子ども達も、そして私達もつまずきを経て成長するものではないのでしょうか。

今回のヒアリング調査では、「親が変われば、子どもも変わる」と言われても「そんなに立派にはなれない」という声が多く聞かれました。「自信を失って育児書を手にする。するとまたそこに書かれていることを読んで『自分はダメだ』と自信を失ってしまう」という声もありました。子育てに悩んでいる人、ストレスを抱えている人がいることは事実だと思います。強い人もいれば、弱い人もいます。大きな力をもつ人もいれば、小さな力しかもたない人もいます。しかし大きな力をもつ人は、小さな力を寄せ合うことの素晴らしさを忘れがちでもあります。

本事業では「いばらきの可能性」を感じることもできました。「子育てトークカフェ」では、「自分も何かをしたい」という思いを強く持っている人々がたくさんいることを知ることができました。「自分自身がこんな場がほしかったから」と、地道な活動を続けていらっしゃる方々とも、ふれあうことができました。

「いばらきの子育て・子育て環境」を考えると、専門家や行政との協働が不可欠であることは言うまでもありません。しかしこれからの「いばらき」を考える上でもっとも大切なことは、一人ひとりの「自分も何かをしたい」という思いを尊重すること。たとえその力が小さなものであったとしても、すべてはその力を生かすことから始めるべきなのではないでしょうか。

最後になりましたが、常磐大学教授 池田幸也先生 と 認定特定非営利活動法人 水戸こどもの劇場 副代表理事 横須賀聡子さんには、たくさんの貴重な助言をいただいたばかりでなく、「子育てトークカフェ」の運営に際してもご助力をいただきました。声をお聞かせいただいた方々も含め、ご協力いただいた皆さまに、スタッフ一同、心からのお礼を申し上げます。

2013年8月

子育てどう (Do) ? プロジェクト運営委員会  
松井 由佳・小野村 哲

## Ⅱ 2012年度 活動報告

### 1. 目的

子育て中の人々が、子育ての今を見つめ、自身の力を活かせるようになるとともに、様々な人々が様々な立場から関わりをもつことで、「いばらきの子育て・子育て環境」の充実を図る。

### 2. 活動の概要

みんなで考える「いばらき教育プラン」の策定を念頭に置き、現在子育て中の人々や子育てに関わる人々の生の声を集めた。

具体的には、保育園や母親サークルを訪れてヒアリングを行った他、語り合いの場としての「子育てどう（Do）？」トークカフェを、つくば市と水戸市において計3回開催するなどした。

また、本報告書を行政やヒアリング協力者等にお渡しし、子育て課題を共有するとともに、簡易報告書としてリーフレットを印刷し、つながりのできた団体から個人に配布することで、本プロジェクトの周知とネットワーク拡大に役立て、次年度以降の活動につなげたいと考える。

### 3. ヒアリングの主対象

未就学児の保護者とその子育てに関わりのある個人・機関

### 4. ヒアリング実施までの経緯

当初、本事業は、子育て中の保護者や様々な立場から教育に携わっている人々、さらには子ども達自身の声を集め、これをもとに市民の手による「いばらき教育プラン」を作成することを目標としていた。たたき台としての案を提示し、インターネット等を介して広く意見を求めるなどし、「市民版いばらき教育プラン」としてまとめることを考えていた。

最終目標がそこにあることに変わりはない。現代社会が抱える諸問題の根底には、1つとして「人任せになりがちであること」があげられると、私達は考えている。子ども達の教育についても、私達はより主体的に関わりをもつ必要がある。「いばらき教育プラン」の策定にも、より多くの人々の声を反映させることができたなら、すなわち、市民意識の向上にもつながるものと考ええる。

しかしアドバイザーのお二人から指摘を受けたのは、「原案を提示して意見を求める」という手法が、すでに上から目線になってはいないかということであった。「市民の手による」と言いながら、限られた期間で形を成そうとしたことが、錯誤の原因としてあったと思う。

そこで私達は、改めて声を集めることから活動を開始することとしたが、そこでもまた、様々な議論があった。同じ市町村内でも、中心部と周辺部では環境が異なる。同じ地域であっても、もともとそこで育った方が子育てをする場合と、転入された方が子育てをする場合とでは、ニーズが違って来る。より広く声を集めるべきか、それとも深く話を聞くべきかと議論した結果、私達は地域に根を下ろしたNPO団体として、対象を絞って一人ひとりの声にじっくりと耳を傾けることを選択した。

## 5. 活動経過

2012年10月	・ 第1回運営委員会開催（目的確認・活動計画検討）
2012年11月	・ 第2回運営委員会開催（活動計画検討・ヒアリング手法検討）
2013年 1月	・ 第3回運営委員会開催（ヒアリング事項共有、専用Webサイト検討）
	・ 専用Webサイト立ち上げ、広報開始
2013年 2月	・ 第4回運営委員会開催（ヒアリング事項共有、専用Webサイト検討）
2013年 3月	・ 第5回運営委員会開催（座談会内容検討、ヒアリング事項共有）
	・ 座談会広報開始
	・ ヒアリング協力依頼チラシ配布
2013年 5月	・ 第6回運営委員会開催（座談会内容検討、報告書内容検討）
	・ 座談会（「子育てどう（Do）？」トークカフェ）つくば会場第1回の開催
2013年 6月	・ 座談会（「子育てどう（Do）？」トークカフェ）つくば会場第2回の開催
2013年 7月	・ 座談会（「子育てどう（Do）？」トークカフェ）水戸会場の開催
	・ 第7回運営委員会開催 （報告書・リーフレットの内容検討、今後のプロジェクトの展望）
2013年 8月	・ 第8回運営委員会開催 （報告書・リーフレットの内容校正、今後のプロジェクトの展望）
	・ 報告書完成、送付
	・ 報告リーフレットの配布

※ ヒアリングは随時行っていた。

### Ⅲ 活動の詳細

#### 1. ヒアリングの実施について

2012年10月から随時、保育園や母親サークル、助産院、行政が運営するファミリーサポートセンターを訪れるなどして、計60名ほどにヒアリングを行った。「子育てどう（Do）？」トークカフェの参加者も聞き手として加わり、現在もヒアリングを継続している。

先にもふれたように、今年度は未就学児の母親を対象として絞り、一人ひとりの声にじっくりと耳を傾げることに努めた。基本情報を除いては質問項目も予めこちらで設定するのではなく、「子育てどう？」から始め、相手が思いや現状をありのままに話せるようにした。



←「ママとベビーの輪」  
(つくば市並木交流センター)  
でのヒアリングの様子



美浦村子育て支援センターでの→  
ヒアリング後

**いほらきの子育てDo?**

\* 現在、子育て真っ最中の、または、子育てに関わっている。

\* 「子育てな」みなさまへ

**ヒアリングへのご協力をお願いします**



いほらきの子育てどう(Do)?プロジェクト

「あなたの子育て、どうですか?」

こう聞かれたときに、あなたならどんなことを話していただけますか? どんなに小さなことでも個人的なことでもかまいません。茨城の「子育てな」みなさまが、日々どんなことを感じ、どんなことを考えているのか、私たちに教えてください。

みなさまの声を集め発信しながら、一緒に、茨城の子育てを考えていければ、と思います。

facebookにぜひご参加ください!  
<http://www.facebook.com/kosodate.do>  
 右のQRコードからもURLを取得できます。



**いほらきの子育てDo?**

**いほらきの子育てどう(Do)?プロジェクトとは**

子ども達を取り巻く環境が大きく変化し、いじめ・体罰など、国内では様々な問題が取り沙汰されています。

茨城県は豊かな自然環境や農産物など、子育てにも大変恵まれた環境です。にも関わらず、魅力度調査では47都道府県中47位といった報告もあります。茨城県民として、私たちに何かできることはないのでしょうか。

私たちは、このような環境の中で、少なからず不安や迷いを感じながら一生懸命に子育てをしている方たちと一緒にこそ、何かができるのではないかと、思っています。

子育て真っ最中の方々が、「どうせ〜だから、仕方ない」「〜のせいではできない」「子育てはこうあらねばならない」といった考えから脱し、「いま」の茨城の子育てを、みんなで考え、みんなで良くしていこうという気持ちと行動を起こせたら、未来の茨城はもっと生き生きとしてくるのではないのでしょうか。

私たちは今、そのきっかけづくりが必要だと考えます。

\*本プロジェクトは、認定NPO法人リヴォルヴ学校教育研究所が中心となり、主に2012年度～2013年度バルシステム助成金にて運営されています。

**子育てどう(Do)?プロジェクト運営委員会**  
 認定NPO法人リヴォルヴ学校教育研究所  
 NPO法人水戸子どもの劇場 横須賀聡子  
 常磐大学 池田幸也

お茶・軽食・保育付きトークカフェ  
 今後も予定しています。ぜひご参加ください。  
 最新情報はWebから。  
[http://rise.gr.jp/net/kosodate\\_do](http://rise.gr.jp/net/kosodate_do)



ヒアリング協力依頼チラシ

**住まい**

子育て世代向けマンションなのに、子どもがうるさいと不動産屋が来て、「静かにしなさい」と叱っている児童相談所が来てしまう。

アパート世帯は自治会に入れてもらえず、コミュニティからの疎外感がある。

ご近所づきあい。仲間に入れようとする警戒され、コミュニケーションがとれないと誤解が生まれる。

三世代住宅だと、夫の愚痴をおばあちゃんにこぼせる。

シングルマザー同士のシェアハウスがあるなら、シングルファザーのシェアハウスもあればいいのに。

**子どもの遊び場**

近所の公園で、親子2人で遊んでもおもしろくない。

外出先は大型ショッピングセンター。ペピーカーに子どもを乗せて、ママ友とおしゃべりしながら店内を回る。

子育て支援センターに行っても一人。家に子どもを見てくれるおじいちゃんおばあちゃんがいるし、自然の中に遊び場があるから、新たな場所を求めてない。

公園が広すぎて、顔なじみができない。

ヒアリングから得た声をまとめてファイリングした資料の一部。話がなかなか出てこない方にはきっかけとして、また折にふれてこのファイルを見ていただくことで、話題を広げ、さらに様々な声を引き出せるようにした。

## 2. 「子育てどう(Do)?」トークカフェの実施について

『共感と発見のための「子育てどう (Do)?」トークカフェ』と題して保育付き座談会を実施、計59名の参加(子ども・ボランティアを含む)があった。各会の様子は下記のとおりである。

---

### ① 第1回 共感と発見のための「子育てどう (Do)?」トークカフェ

- ・日時：2013年5月18日（土）
- ・場所：つくば市松代交流センター
- ・参加人数：12名

試行的な意味合いも含め、第1回トークカフェをつくば市内で行った。

乳幼児から中高生までの子育て中の母親や父親、祖父母として子育てに関わっている方々、元教師、保健師、臨床心理士、教育や子育てに関心のある、様々な世代、様々な立場の方が集っての座談会となった。

子育て環境については、市内に転居してきたという方からはまさに「孤育て」の状態にあったことが、また、小学校や特別支援教育に関する情報の不足、不安も話題としてあげられた。

子育てに対する価値観の違い、3歳までは母親が子育てをすべきなのかなどについても話し合われ、「子育てに専念できる環境」を求める声がある一方で、「社会人としての自分も大切にしたい」という思いも語られていた。



## ② 第2回 共感と発見のための「子育てどう (Do) ?」トークカフェ

- ・日時：2013年6月22日（土）
- ・場所：つくば市民大学
- ・参加人数：30名

常磐大学の池田幸也氏をファシリテーターに迎えて実施した。多くの方がお昼を持参され、終了時間（13：00）が過ぎてまで話が尽きることがなかった。

最初は、「夕飯の用意はどうしている？」といった身近な悩みから始まり、子どもとの関わり方、働き方についてなど、子育てをする中で誰もが悩んでいることに話題が広がっていった。

「第一子への要求がつつい強くなり、バトルになってしまう」「つつい感情で怒ってしまう」といった発言に対して、皆が共感し笑い合うなど、子どもを預けて、ゆっくりお茶をしながら話ができる時間を楽しんでいた。

参加者からは「（子育てについて）先生の話聞く機会はあったが、今日のようにいろいろな方とお話しできたのは初めて」「地域の子育て情報が交換できた」「自分だけじゃないんだとわかって、少しホッとした」などの声があったほか、自らも「このような企画に関わりたい」という声も寄せられた。

また、「これまで何となく自分の子育てに引け目を感じていて、このような機会があっても参加できなかった。身近過ぎないことがかえっていい」「初対面だからこそ、気兼ねなく話ができる部分もあり、とてもリフレッシュできる時間だった」「普段は知り合いのママ友としか話す機会がないので新鮮だった」という声もあった。



### ③ 第3回 共感と発見のための「子育てどう (Do) ?」トークカフェ

- ・日時：2013年7月6日（土）
- ・場所：茨城県立健康プラザ（水戸市）
- ・参加人数：17名

常磐大学の池田幸也氏をファシリテーターに迎えて実施した。水戸市の他に日立市、大子町などからの参加があった。未就学児の母親だけでなく、子育て支援をしている人の参加もあり、終了時間の間際まで話が弾んだ。

話題は多岐に及び、夜、子どもが寝付かないときにどうしているかなど具体的な話の他に、「地域がらか、支援センターに行っても自分たち親子しかいない」など子育て環境の地域間格差なども話題となった。「孤育て」が指摘される中で、「たまにはリフレッシュをしたいと思う反面で、子どもを預けることに罪悪感を感じてしまう」という声もあった。父親の子育てへの参加についても、意見が交わされていた。また、数年後の小学校入学への不安や学校との関わりをどのようにしたらよいかなど、就学についても話題にあがり、皆が関心を寄せていた。

参加者からは「子育て中の方だけでなく、子育てサポートをしている方々と幅広い話ができよかった」「多くの意見や様々な考え方を聞くことができ、自分自身視野を広く持って子育てができそう」「話が出来てよかった。次はいつあるのですか」などの声があった。

他に「思っていることがあっても、地域がら周りに遠慮をして発言できない」「小さな町や集落だと顔が見えすぎるから、かえって言いにくいこともある」「転勤族が多い地域は、知り合ってもまた転勤してしまうので、交流が生まれにくい気がする」といった声も聞かれた。



#### ④ トークカフェ参加者から寄せられた感想

- いろんな年齢層と場所の方のお話を伺うことができ、面白かったです。どこにいても子育てしている人がいるのに対し、子どもの行動半径はとっても狭くて、子どもに関わる大人がその子どもの世界の狭さを理解し、外界へ導いてやってやる事が、大人の仕事なのかなあと感じました。ありがとうございました。
- 今日は貴重な機会をいただき感謝しています。託児のボランティアの方にも感謝です。こういう機会を私は待っていたのだと思いました。すごく楽しかったし、また参加したい。企画する側に関わっても楽しそうだな、なんて思いました。
- 子が同じくらいのお母さんと話す機会は多くても先輩方のお話を伺える機会があまりないので新鮮でした。逆にお話を伺って今を大切に過ごそうと思えてよかったです。ありがとうございました。
- とても楽しかったです。保育付きで初めてお会いするママさんと話すことができ、たくさん悩みを打ちあけられ、共感し合うことができました。保育ボランティアさんの方とも少し話ができ、このような機会をもっと増やして頂ければ子育てママの「孤立感」がものすごく軽減するのではないかと思います。
- とにかく楽しい時間でした、もっともっと話をしたいし聞きたいと思ってます。次回も参加します！
- 自分自身に発達障害があり、人との関わりの中で様々なトラブルに遭遇してきたので、消極的になっていましたが、こういった集まり（基本的には嫌いではないので）も良いなあと感じました。また機会があったら参加してみたいです。
- 娘と2人であることが多いので、他のお母さんと話せる機会ができてとても良かった。これから出てくるであろう悩みも解決方法を教えてもらって、とても参考になりました。

「今日の夕ご飯、どうする？」

「テレビとどう付き合う？」

「こんなことでも話していいの？」

いろいろ話して  
すっきりしちゃいましょう♪

お茶・  
お菓子付

保育あり

共感と発見のための  
「子育てどう(Do)?」  
トークカフェ

2013年6月22日(土)10:00～12:00 つくば市民大学  
(～13:00 いっしょにランチも可)

2013年7月6日(土) 10:00～12:00 茨城県立健康プラザ  
(～13:00 いっしょにランチも可)

参加費 500円 (お茶・お菓子・資料代) \*保育は無料です。

対 象 現在 未就学児を子育て中の保護者の皆様、  
その他ご関心のある方 (各回20～30名程度)

ファシリテーター 常磐大学 池田 幸也さん

facebookにもぜひご参加ください！  
<http://www.facebook.com/kosodate.do>  
右のQRコードからもURLを取得できます。



主催 いばらきの「子育てどう(Do)?」プロジェクト運営委員会  
助成 ハルシステム茨城 2012年度くらし活動助成基金  
後援(申請中) 茨城県、茨城県教育委員会、つくば市、水戸市



### 気軽に子育てトークしませんか？

お茶とお菓子を囲んで気軽に子育てトークしませんか？  
共感しあったり考えあったりしながら、一人ひとりが自分の力を感じ、  
認め合い、元気になれたらと思います。  
もしよかったら、お弁当も持ってきて下さい。お時間の許す方は、お子  
さんも交えて、いっしょにランチをしませんか？

- \* 保育は12時までです。
- \* 保育をご希望の場合は、参加希望日の15日前までにお申込みください。
- \* 保育は定員になり次第、受付を終了させていただきます。ご了承ください。

【参加申込書】

お名前(ふりがな)	希望会場(どちらかに○)		
	つくば市民大学・茨城県立健康プラザ(水戸)		
メールアドレス	TEL	FAX	
保育が必要なお子さんのお名前(ふりがな)	月齢	歳	ヶ月
保育が必要なお子さんのお名前(ふりがな)	月齢	歳	ヶ月
保育が必要なお子さんのお名前(ふりがな)	月齢	歳	ヶ月

いばらきの「子育てどう(Do)?」プロジェクト運営委員会  
認定NPO法人リヴォルヴ学校教育研究所 松井由佳、椎名千恵、北村直子、大塚愛子  
NPO法人水戸こどもの劇場 横濱賢聡子

事務局(担当)：認定NPO法人リヴォルヴ学校教育研究所(松井)  
〒305-0051 茨城県つくば市二の宮4-3-2 二の宮コーポC101  
TEL 029-856-8143 E-mail rise@cuore.ocn.ne.jp

申込書FAX番号

FAX 029-896-4035

9

### 3 . Facebook サイトの運用について

2013年1月に、Facebookページ「いばらきの 子育てどう (Do) ?」を立ち上げた。これまでに「子育てトークカフェ」の広報を行うほか、ヒアリングで集まった声を掲載などし、アクセス数も徐々に伸びてきており、8月のページ閲覧者数は、20日までで延べ429名となった。

今後は、ヒアリング等に寄せられた声とともに、子育てに関する提案も掲載し、意見を求めていく予定である。



↑ 「いばらきの子育てどう (Do) ?」 Facebookページ (URL <https://www.facebook.com/kosodate.do>)

さらに、アドバイザーでもある横須賀聡子氏に原稿をお願いし、「子育てな人」というコーナーで紹介。下記記事に、多くの子育て世代が共感を示していた。

○ **ワタシは、家事と子育ての苦手な専業主婦！** ○

結婚して、さあステキな家族をつくるんだ！との決意もむなしく、ルーティーンワークと管理の苦手な私が、いい嫁、いい妻、いい母親になれるわけなどなく、あっという間に問題が山積、無力感と孤独と不安に押しつぶされそうな毎日を過ごすことになった。

(次ページへ)

赤ちゃんだった長男が泣けば、私の方が泣きたくなる。

会話にならない子どもとの毎日、ひらがなしか読まない生活は、社会の中でたった一人だけ取り残されていく自分というイメージしか浮かばない。

私は、どんどん疎外感を膨らまし、外出先で子どもを気遣ってくれる年長者の一言も、ダメな私への非難に聞こえ、優しい言葉や支援の手にも怯えていたように思う。

そんなある日、デパートの床に寝転んで泣きわめく我が子に困り果てている私に、今の私くらいの年齢の女性が声を掛けた。

視線が合った瞬間、「また非難される…」と身構える私に、「このくらいの子がいるとママは大変よね」とさりげなく声を掛けて、そのまま通り過ぎていったのだった。

でも、その一言に何故だか涙がこぼれた。今まで親切に声を掛け、子どもを抱き起してくれたり、子どもをあやしてくれた人たちのように、何かしてくれたわけでもないのに、その出会いに私は救われた。

きっと、わかってもらえた、という感覚が、辛いのは自分がダメだから、子どもがかわいそうだ、できない私を誰も許してくれない、母親なんだからもっと頑張らなきゃ、と固くなっていた私の心をほどいて、心の中にため込んで行き場を失っていた涙が溢れたのだと思う。

## ○ 子どもたちの未来は、ワタシたちの社会の中に！ ○

近所の公園で、近くに住む同い年の子どもがいる女性に出会った。いわゆるママ友というやつができたのだ。

彼女は、子ども好きで、家事が上手、しっかりとしたお母さんタイプの人に見えた。

子どもが子育てをしているような私たち親子の危うさに、手を貸さずにはいられなかったのだろう、毎日のようにお茶に誘ってくれ、ときには昼食にも招いてくれて、子どもを預かってくれもした。

私たち親子は、子どもが幼稚園、小学校、中学校と通う間、彼女を介してご近所の子どものいる家族とつながり、たくさんの家族の中で私も子どもも育ててもらったのだった。

そのつながりは、子どもたちが大人になった現在でも続いている私の宝物だ。

私が、（水戸）こどもの劇場という場で、お母さんたちと一緒に子育てをしていきたいと思う理由は、これらの経験からだ。

私と私の子どもたちが生き延びることができたのは、私たちを支えてくれたたくさんの人に恵まれたからだった。

だけど、もしかしたら、どんな家族でも、子どもは家庭の中だけでは育たないのかもしれないとも思う。

たくさんのかかわりの中で泣いたり、笑ったり、怒ったりしながら、子どもも大人も自分を確認し、居場所をつくっているのではないか。

それならば、私がしてもらったことを次の人たちに返していきたいと思う。

人がつながり、支え合い、必要なことを創り出し、一緒に育っていける場をつくろう。子どもたちという未来は私たちの社会の中で育っている。

## IV 寄せられた声とその分析

アドバイザー会議では、活動の中で寄せられたたくさんの声を共有するとともに、分析を行ってきた。

各ヒアリング対象者の地域・年齢について、運営委員会内では考慮に入れたうえで分析をしたが、本報告書においては、個人情報保護の観点から、明記を避けた。

次ページより、下記テーマで寄せられた声とその分析を紹介する。

<テーマ>

- ・住まい
- ・親子の遊び場
- ・一時保育
- ・働き方
- ・年齢と子育て
- ・お父さん
- ・シニア世代との関わり
- ・就学・小学校との連携
- ・その他（情報、産前・産後、繋がり・関わり方、幼稚園、子育て基準）



## 住まい

- 子育て世代のための賃貸住宅が（もっと）あったらいいのに。
- 子育てに適切なスペースや安全性を持つ賃貸住宅は、公営でも家賃が高くて入れない。
- シングルマザー同士のシェアハウスがあるなら、シングルファザーのシェアハウスもあればいいのと思う。＜※シングルマザーではない母親の意見です＞
- 子育てマンションを探して入居したのに、「子どもがうるさい」と他の住民から不動産屋に苦情が入ったようで、「静かにしましょう」と貼り紙をされた。静かにするようと子どもを叱ると、注意の音が大きかったのか、今度は虐待を疑われ、児童相談所職員に3回も訪問されてしまった。  
他の人の迷惑にならないようにと叱ると、疑われ、「こんな子育てしにくい環境だったら子どもの首をしめて…」とってしまう。
- 子育て家庭同士のご近所づきあいが難しい。引っ越してきたお隣さんが早く地域に馴染めるように、また同じ年代の子どもを持っているので仲良くできればと思い、おすそわけをしたり、行事に誘ったりしたところ、（相手は）何かに勧誘されると思ったのか、こちらを警戒している様子。庭の植木の水やりで隣の家の塀近くに行っただけで、（相手は）覗かれていると思うのか、カーテンを勢いよく閉めてしまう。お母さんの喚き声と子どもの泣き声がずっと響いているときがあるが、どう声をかけたらいいのか、どうしたらいいのかわからない。
- 三世代（おばあちゃん、義理の両親、自分達夫婦）での同居。世代間の関係はよく、夫とけんかしても、おばあちゃんに愚痴を聞いてもらったりできる。義理の両親に愚痴を言うのは、夫との関係が近すぎる（自分の息子だから）のでこちらも気を使ってしまう。嫁にとっておばあちゃんがちょうどよい距離。
- 多世代同居から核家族になったら、子ども達が「前のほうが良かった」と言ってさびしがる。大人にとっては、人間関係が窮屈になることもあるが、子どもにとっては、多世代同居のほうがいいのかと思った。



### 子育てどう(Do)?」プロジェクトとしてのコメント

子育て世帯にとっての住まいに対する視点は、周囲との関わりにウェイトが置かれているように感じました。多世代同居については肯定的な意見も多かった反面、「お互いに遠慮してしまう」「子育て方針に食い違いがある」などの声もあがっていました。核家族化が進み、家族外とのコミュニケーションもとりにくくなっている子育て世代にとって、地域に「新しい家族の形」をつくるような住居のあり方や都市計画についても 提案していくことが必要なのではないのでしょうか。

## 親子の遊び場

- 近所に子どもが遊べるような公園がない。
- 公園はあるが、草がぼうぼうで誰も寄りつかない。
- 公園が広すぎて、かえって交流が生まれにくい、顔なじみもできない。
- 近所の公園に行っても他に親子連れがおらず、自分達だけで遊んで帰ってくる。これでは家の中にいる時と変わらず、おもしろくない。
- 今は住居も学校も洋式トイレが主流。子どもが慣れていない和式のトイレしかないところ（公園等）は困ってしまう。
- 子育て支援センターに行っても、結局親子で遊ぶだけで、自分から誰かに話しかけなければ、誰とも会話せずに帰ってくることもある。
- 交流を求めて子育て支援センターに行っても、誰もいなくて自分達親子だけ。地域がら、面倒を見てくれるおじいちゃんおばあちゃんがいる、自然の中にも遊び場があるから、新たな出会いの場を求める人も少ない？
- 今は車に乗ってどこへでも行けるので、近くの公園や地域の子育てサークル等には行かなくなっているのではと感じる。郊外や県外の大きな施設に遊びに行く人も多いと聞く。
- ママ友との会合は、大型ショッピングモール。買い物をするわけでもなく、ベビーカーに子どもを乗せて店内を回りながら、話をして過ごす。1日中いる時もある。
- 子どもが安心して遊べる空き地が、なくなっている。小学校の校庭を放課後に開放してはどうか。地域の大人が見守る役割を担えば、安全管理もできると思う。



### 子育てどう(Do)?プロジェクトとしてのコメント

親子の遊び場として望まれているのは、自分の足で気軽に行けて、親子ともに仲間と過ごせる場所であるようです。しかし、そのような場としての公園や公的施設が、ニーズに即していない状態であるという声が多く聞かれました。

場のあり方を考えることから維持管理まで、行政等や特定の個人・グループに押しつけるのではなく、使う人みんなで話し合い、活用していくことのできる仕組みにすることも重要です。そのためにも、親子の場を、子育ての場としてだけでなく、世代間交流の場としても考えること、朝・昼・晩と多世代がそれぞれに使い道を持つような場を作り出すことが必要なのではないでしょうか。

## 一時保育

- 子どもと24時間向き合う日々。子育ては楽しいことばかりではなく、慣れないこと、思い通りにならないこともあり、疲れてしまって辛い時がある。（これでは自分にも子どもにも良くないと）リフレッシュするために一時保育を利用したいが、お金がかかるので躊躇してしまう。
- やむを得ない事情で子どもを預ける場合と母親のリフレッシュのために預ける場合とでは、預け先のスタッフの対応に温度差があるように感じる。母親が病気などで面倒が見られず預かってもらう時は、快く引き受けてくれるが、リフレッシュとなると「何で預けるのか？」という雰囲気を感じてしまう。
- 母親も子どもを預けるときには、罪悪感があるし、預けるのがおばあちゃんなど身内の場合でさえも遠慮してしまう。しかし、気持ちを切り替えて預けないと本当にリフレッシュできない。
- 託児付きで格安の習い事（産後ヨガやエアロビ、コーラス等）が欲しい。「ママ向け」と書いてあっても託児体制が整っていない場合が多く、年齢が小さい子がいると参加できない。
- 子どもの急な体調不良の際、預かってくれる施設が欲しい。
- 授乳中で体がぼろぼろのときに骨折をしてしまった。実家は遠いし近くに頼れる人もいない中、一時保育を利用したいと思ったが、1歳からしか預かってもらえないところが多く、預けられなかった。ハイハイを始めた0歳の息子と2人で過ごすのはとても大変だった。一時保育の預かり月齢をもっと下げてほしい。
- 一時保育を利用するにも地域によって抵抗がある。田舎だと、近くに世話をしてくれる身内がいるのに、なんでわざわざ他人に預けるのかという感じを受ける。



### 子育てどう(Do?)プロジェクトとしてのコメント

様々な理由での一時保育の質と量が緊急に求められていると感じました。特に、母親のリフレッシュのための一時保育へのニーズは高いのですが、一方で、周りの目を気にする意見も目立ちました。また、0歳児の一時保育の場が少なく、孤立して困っている母親が多い実態もありました。

「一時保育」という言葉がよく聞かれるようになったのは最近のことです。以前には地域の人間関係で支えられていたものが、なくなってしまうためとも考えられます。長期的な視点で見れば、地域の子どもを皆で育てる関係性の構築も重要だと思います。

## 働き方

- 子どもが小さいうちは、フルタイムで働くことに抵抗がある。かと言って、週2～3日のパートタイム勤務では、子どもを市町村の認可保育所に入れてもらえないため、無認可の保育所に預けるしかなく、それでは料金が割高なので収支が合わない。働きたいと思っても、フルタイムか専業主婦かの選択肢しかないのはつらい。
- 職場には、検診・予防接種休暇や育児休暇などの制度はあるが、特に男性は、よっぽど凶々しくないと使いづらい。制度はあっても、職場の雰囲気では休暇をとりやすいかどうかが決まってしまう。
- 結婚を機に、夫の故郷に引っ越し。知らない土地で知り合いもおらず、他の母親たちと知り合ったのは、町が主宰する子育て教室だった。地域の母親たちが集まれる子育てサロンのような場を作り、さらにその運営をすること＝“仕事”として成り立てばいいなと思い、ベビーマッサージの資格を取った。同じ働くでも、スーパーのレジのような“単なるパート”ではなく、資格も活かし、かつ子育て支援ができる仕事をしたいと模索中。このような場が仕事として成り立てば、自分の子どもとも関わりながら仕事ができるし、母親も社会にも参加できると思う。
- 0歳から子どもを預けて働きたいと言ったら、互いの両親ともに3歳神話を元に大反対した。子どもが大きくなるまで母親は子育てをするものという考えが根強く、出産前のキャリアや仕事を捨てるを言われているようでつらい。仕事も簡単に辞められないし、辞めたくない。
- 生後二か月から、保育園に子供を預けて復職。親が仕事で忙しくあまり関われなくても、保育園の先生方など、良く見てきちんと育ててくれている人が周りにいれば、子どもは育つと思った。また、子ども何でもかんでも親に頼るのではなく、自分のことは自分でやるという姿勢が身についている。
- 週1～2日勤務のニーズは多いので、ワークシェアリングができるようになるといいと思う。



### 子育てどう(Do)?」プロジェクトとしてのコメント

家計を支えるため、あるいは自分自身の生きがいを求めて「働きたい」という声、「子どもとの時間も大切にしたいので、週2～3日の働き方をしたい」という声もありましたが、企業や保育制度がそれに応えられない実態があるようです。

そのような現実の中から、ベビーマッサージやベビーサイン等、乳幼児の親子に需要のある分野で資格をとり、自ら教室を開講して自営で働こうとする母親も増えていると感じました。

様々な形で母親が社会と接点を持てるようにする仕組みが求められているのではないのでしょうか。

## ■ 年齢と子育て

- 40歳を過ぎると、自分自身の身体にこれまでにない変化が生じてくる。若い頃は、体の動きも軽いし、テキパキとこなせていた。疲れていても、子ども優先に考えられていた。しかし、今は自分の体とどう付き合っていくか考えることが多くなり、子どものことだけを考えてはられないし、見てもらえない。
- 第一子と末っ子とでは年齢があいている。末っ子の子育てをしていると、「若い頃はこんなこともできたのに」と、“若いころの子育て”と“今の子育て”とを自分自身の中で比べてしまう。成人になった第一子の子育ては“精神面”、末っ子の子育ては“体力面”と求められることも違ってくる。悩みもそれぞれなので、接し方も変えないといけない。
- 自分は年をとっているのに、若いお母さんに挑戦じゃないけど、「年相応の子育てをしなければ」という気持ちがある。
- 「もう若くないんだから早く産まない」と、「年をとってからの子育ては大変よ」という周りからの言葉がづらい。悪意はないのかもしれないが、プレッシャーになってしまう。
- 出産よりも、その後の子育ての方が心配。体力面もそうだが、経済面も心配になる。
- 第二子が欲しいが、なかなか授からない。不妊治療をしているが、年齢のことを考えると、いつまで続けたらいいのか迷ってしまう。
- ママサークルやママの集いなどママさんの集まる場所は、自分より若い年代の人が多くて、なんとなく参加しにくい。
- 周りのママより年齢が上である分、特に第二子以降の子育てにおいては、リーダー役、調整役として立ちまわるようにしている。そのほうが居心地がいい。



### 子育てどう(Do)?」プロジェクトとしてのコメント

30代後半、40代の子育ては、成熟した大人がゆとりを持って子どもに向き合うことができる、と一般的に思われていることが、当事者にとって負担になる場合も多くあります。

多くの母親にとって、どんな年齢であっても初めての子育てには不安も多く、毎日が未知との遭遇です。子どもが多かった時代には、同じ年代の話しやすい親が、第三子、第四子の親として側にいて、話を聴いてくれ、子育てのリーダー的存在として、若い親たちと自然につないでくれるようなこともありました。が、少子化の進む今、なかなかそれは望めません。

年齢に関係なく、子育て中の困難に寄り添う支援と母親が自分をケアすることのできる機会が求められているのではないのでしょうか。また、高齢出産のグループのような、同じような年代の親たちが、出会い、つながれるような機会をつくることも必要なのでしょう。

## お父さん

- 夫のいいところは、「趣味の〇〇が得意」「買い物のときに子どもを見ていてくれる」ということだけしか言えない。もっと直接子育てに参加してほしいと思う。
- 0歳児の母親で、専業主婦。夫は、仕事でもお昼休みに帰ってきてご飯を作ってくれる。理由は「亭主元気で留守がいい」というような扱いをされるのが腹立たしいからとのこと。
- 夫は、料理も洗濯も掃除も仕事のようにこなす「イクメン」。自分はそんなに家事ができるほうでもなく、「男は仕事、女は家庭」の両親に育てられたからか、夫に対して罪悪感を感じる。
- 子どもが寝る時間と夫の帰宅時間が重なってしまう。夫が帰ってくると子どもは起きていたくて寝てくれないので、子どもを寝かしつけるために、夫には時間をずらして遅く帰ってきてもらうようにしている。
- 夫は、よく子供の面倒を見てくれるし、子育てにも協力してくれるのでとても助かっている。何もしてくれない父親だったら帰ってきてもらっても仕方がないと思う奥さんがいるかもしれないが、手伝ってくれる父親だから仕事から早く帰って来てくれないかなと思う。頼りにしている。
- 父親に子育てに参加してもらうためには、父親に早く帰ってきてもらえる社会の仕組みづくりから始めないといけない。
- 仕事で帰りが遅い父親を子どもが寝ないで待っている。平日は顔を合わせる時間が少ないので、朝ごはんの時間などちょっとした時間を大切にしている。子育てに参加する方法として、ちょっとした時間でも大切に子どもとの関わりを持つこと、妻の話を聞くことを心がけている。【父親談】
- 母親との役割分担として、子どもをきちんと叱るのが父親の役目だと思う。【父親談】
- 平日は妻と子どもが家で二人きりで、妻が育児に疲れ気味になってしまった。休日は家でゆっくり休みたいと思うが、妻と子どもと外出して、妻が気分転換できるようにしている。【父親談】



### 子育てどう(Do)?」プロジェクトとしてのコメント

子育てに参加しない（できない）夫への不満の声がある一方、夫をそうさせている社会のシステムに不満を向ける母親もいました。また、男性が世間から「イクメン」を推奨される中で、夫婦の意識のずれや不自然さも生じてきているように感じました。

今後の子育て支援においては、男性の立場からも考える必要があると思います。父親の子育てへの参加が大切であることは言うまでもありません。しかし、家計の事情などで遅くまで働かざるを得ないという場合もあり、そのような父親に多くを求めることも難しいのではないのでしょうか。働き方について、男女ともに再考する必要があると感じました。

## シニア世代との関わり

- 年配の人から「昔は良かった」「私のときはこうだったから今のお母さんもそうすべき」というもの言いがある。今は子育ても多様化。自分の経験だけで一様にものを言うのはどうかと思う。
- 「〇歳のわりには小さいわね」、「そうじゃなくて〇〇したほうがいいわよ」など、立ち話で言われるような何気ない言葉でも、子育てに不安を抱いている時は、自分の子育てが間違っているのだろうかとより不安になったり、私は駄目なのかと傷ついてしまう。
- いやいや期の2歳児に対して、たまに来る義母・実母がともに「ぶってもいい？」と聞いてくるので、「だめ」と言い続けている。今と昔では、体罰への意識が違うと感じる。
- 近所を散歩していると、シニア世代の方とよく会う。交流を深めたいと思うが、挨拶するだけで、それ以上の関わりはない。身内のシニア世代だけではなく近所に住むシニア世代の方にも子どもと関わってほしいと思う。
- 親戚や両親など自分の身内だと子育てに対する“アドバイス”ではなく、価値観の違いを言われやすいので素直に聞けない。しかし、先輩達の話も聞きたいので、近所のシニア世代との交流はしたい。第三者だから耳を傾けられることもあるし、悩みを話せることもある。
- 祖父母が、子育てしている娘・息子・嫁に遠慮している。
- 子育て世代をどうサポートしたらいいかわからない。<※シニア世代の方の意見です>
- 孫と接する時、自分の価値観や自分の経験を押し付けないように、今の若い世代の人の子育てはどうなんだろうと聞いたり考えたりするようにしている。<※シニア世代の方の意見です>
- 働き盛りで仕事が忙しく子育てに参加することができなかった。今は、仕事も終え、時間に余裕が出来た分、孫の子育てを手伝いたいと思っている。<※シニア世代の方の意見です>



### 子育てどう(Do?)プロジェクトとしてのコメント

これまでの生活の中で、子育てに関わる事が少なかった母親たちが、希薄な人間関係の中で、少しでも何かを言われたら不安になり、フォローも受けられずにさらに不安になってしまうという流れがあるように感じました。

一人ひとりの親の背景、社会状況を前提としての声かけのあり方は、シニア世代に関わらず、すべての世代が共通して考えていくべき課題だと思います。

一方で、特につながりの薄い地域で子育てをしていて、声をかけられることもない母親たちからは、近所でよく見かけるシニア世代に関わってほしいという意見もありました。シニア世代としても、サポートしたいが遠慮しているという実態があるようです。お互いが尊重しあいながら関係を作り、子どもたちを育てていける環境づくりが必要だと思います。

## ■ 就学・小学校との連携

- 子どもが未就学児の段階で発達障害と診断されたが、情報がなくて今後のことがまったくわからないので不安。同じような境遇の方たちにもっと話を聞きたい。
- 子どもが通っていた保育園では、園の方針として文字の指導は行っていない。小学校に入るまで文字を使わなかったため、入学後ずいぶん経ってから文字が書けないことに親は気がついた。文字が書けずに小学校に通っていた本人は大変だったと思う。入学前に分っていたらよかったのかなと思う。
- 保育園や幼稚園は、それぞれの園で特色がある。いろいろな教育方針で育った子が、同じ小学校に入るとギャップがある。
- 保育園や幼稚園はお迎えがあるので、園での子どもの様子を見ることができる。そこで、保護者同士も交流ができるし、先生達とも話ができるので、開かれた感じの中で子どもを預けられた。しかし、小学校に入ると学校に足を運ぶ機会も減るので、就学前と比べて閉鎖的になる感じがする。PTA活動に参加すればと言われるが、働いているとなかなか参加できないと思う。どうやって学校とコミュニケーションをとっていけばよいのだろうか。
- 小学校は、保育園や幼稚園のように保護者がふらりと立ち寄って、様子を見ることができる雰囲気ではない。子どもがどんな生活を送っているのかは気になるので、地域の人が気軽に立ち寄れるような環境ができればいいなと思う。
- 保育園や幼稚園で培ったネットワークが小学校に入ると途切れてしまう。一人ひとりの子どもを、小さい時からずっと見ていてくれる大人と、つながりを保てればいいなと思う。
- 幼稚園や保育所でもいじめがある。子どもが親にも言わないし友達にも言えないでいるようだ。いじめが起きた時、親はどのように関わっていったらいいのか。
- 第一子の場合は特に小学校での生活が分らないし、小学校に上がることに對して漠然とした不安がある。小学生の子を持つ先輩ママの話を聞く機会が欲しい。



### 「子育てどう(Do)?」プロジェクトとしてのコメント

「発達障害」に関しては、十分な情報を得られず不安になり、特に小学生になってからのことを心配する親が多いようでした。診断を受けても、「診断後のサポートが薄く、不安が増した」という声もありました。

また、未就学児とともに小学生の子を持つ親からの意見で特に多かったのが、就学前と就学後の子育て・子育て環境の大きな変化に対するものでした。就学前から就学後の子育て・子育てをつなぐ人や仕組みの存在が求められていると感じました。

## ☐ その他

### 【情報】

- 子どもが0歳の時、多くても1時間しか寝てくれなかった。そのときは本当に暗黒時代で、今思えば育児ノイローゼになっていた。「寝ない赤ちゃん 何で」などと検索してネットで調べ、いろいろな人の意見を参考に試してみても、うまくいかずに負の連鎖が続いていた。
- 悩んでいる人ほど見る育児書が、ストレスの原因にもなる。あんなに立派に離乳食を作れない。
- 子どもとの遊びは、おもちゃがあればいいというものではない。その月齢の子どものに合わせた遊び方の情報がほしい。「〇歳児集まれ」というようなイベントも、ママのストレス発散のためという目的に偏りがち。
- 不要になった物を寄付したり、譲ったりできる施設の情報、病院（ネットで予約できるか）、公園や遊び場(どんな遊具があるか)等の子育て情報一覧があると便利だと思う。

### 【産前 産後】

- 出産前の情報は、悪いことも知っておきたい。つわりがこんなにひどいと思っていなかったし、出産がこんなに痛いと思わなかった。また、こんなに自分の時間がなくなるとも思わなかった。
- 産後のママのケアについて、腰のケアのための骨盤ベルトの情報はたくさんあるけど、腱鞘炎のケアのための情報はあまりなくて、お医者さんでも「動かさないように」とか大変なテーピングの仕方とか、現実味のない対策しか提示してもらえないことが多かった。簡単なマッサージやテーピングの仕方が雑誌などに掲載されていると、手軽にできるので嬉しい。
- 下の子がいる分、2人目の妊娠期のほうが1人目よりも大変だった。2人目以降も妊娠期のサポートを厚くしてほしい。
- 産んだ人に対するサポートは色々あるけど、産みたくても産めない人（不妊の問題）に対するサポートも、資金面精神面ともに、もっとあったほうがいい。そこを支援すれば、子ども自体が増えていく可能性があるのだから。

### 【繋がり・関わり方】

- 0歳と1歳の差は大きく、一緒に遊ばせることは難しい。1歳は目と手が離せず、ママ友どうしでゆっくり話ができない。同じ0歳でも月齢が違くと遊び方が全然違う。0~1歳のときに年齢、特に月齢が同じ子どもを見つけるのは難しく、見つけたとしても、ママ友となる確率はさらに低い。
- 友達の家に遊びに行った際、子どもに注意したら、嫌な顔をされた。友達でさえそうなのだから、他人の子どもを注意するのは躊躇してしまう。
- 専業主婦で子どもと二人きりの毎日だと、社会から取り残されてしまっているような気がする。子育て中でも社会に参加したい。

## 【幼稚園】

- 公立幼稚園は、料金が安い人気がない。PTA活動で草取りなどの作業があり、毎日のお弁当づくりや年間行事以外に手をとられたり、2年保育で統一されていたりすることに不満がある人が多い。私立幼稚園の3年保育やアレルギー対応などのサービスにニーズがあると感じる。
- 幼稚園のPTA活動に積極的に参加することで、子育ての悩みの半分は解決できると思う。

## 【子育て基準】

- 一人っ子なので、失敗することを恐れているのではないかと感じる。兄弟がいなくて手本が見せられないので、色々な人との触れ合いの中でコミュニケーションをとらせたい。刺激を受けてバランスよく育ててほしいと思うので、早めに集団活動に参加させたい。
- 子育て支援センターなどでよく聞かれる「早いね」というほめ言葉。「早いことは良いことなのか？」という問いかけが必要だと思う。
- 子どもの頑固さやこだわりが強い。このまま大きくなったら良くないのではとってしまう。
- 子どもにごめんなさいを言わせる前に、親がきちんと子どもに対してごめんなさいを言えるかどうか大事だと思う。
- 子どもが生まれると、「しばらくは子育てに専念してね」と言われてしまう。子育てに専念したら周りにつながりを求めるのが難しいので孤独になってしまう。
- 今は1歳から通える様々な幼児教室がある。自宅がある地域は田舎なので幼児教室はないが、大きな町に行くと沢山教室があるし、ショッピングモールの中にまでも入っている。早期教育が大切などと聞くと、「早くから通わせた方がいいのかな。」と悩んでしまう。  
その反面、自宅がある地域のように「のんびりした環境で育てる方がいいのかな」とも思うが…。いつからどのような教育環境に身をおいたらよいのか考えてしまう。



### 子育てどう(Do)?」プロジェクトとしてのコメント

多くの母親たちが、限られた人間関係の中で、インターネットや雑誌、育児書でも情報を集めて選択して、一生懸命に子育てしている様子が伝わってきます。その人その人の選択を支援し、何か聞いてほしいことやしてほしいことがあったら言えるような人間関係を作ることが、一番の子育て支援なのではないでしょうか。

また、「短時間で簡単にできる夕食を知りたい」、「子どもにテレビを見せる時間はどのくらい」、「1日の時間をどうやって使っているの」など、生活の中で感じている困りごとでも聞かれました。母親同士が気軽におしゃべりをして解決できるような“場”も大切なのではないのでしょうか。

## V おわりに

本事業を通じて私達が改めて実感したのは、様々な「違い」です。言葉の上で「違い」は「間違い」にも通じるなど、あまりよくない意味で捉えられがちです。しかし「違い」は、必ずしもマイナスに捉えるべきものではありません。

「親が変われば子どもも変わる」と言われます。たしかにそれは事実だと思えますし、親に限らず子育てに関わる人が、スキルを身につけられるようにすることも必要だとは思えます。しかしその一方で、「こうでなければいけない」「このようにあるべきだ」という既成概念が、かえって悪循環を生んでいることも少なくないように思えます。

「子育てに専念したい」という人もいれば、「子どもとの時間も大切にしながら、週に数日だけ働きたい」という人、「子育てもおろそかにはしたくないが、自身の仕事も大切にしたい」「働かなければならない」という人もいます。今回はおもに未就学児のお母さん方の話を聞きましたが、世間で「育メン」がもてはやされる中、「仕事もしたい」「せざるを得ない立場にある自分に罪の意識を感じてしまう」というお父さんの声もありました。

「家にいてばかりでは、息が詰まってしまう。たまには息抜きをしたい」という母親の声に対して、「わがままだ」とする人もいます。「昔はみんなそうやって子育てをした」という人もいますが、昔の子育て環境と今の子育て環境では孤立感に違いはないでしょうか。親が忙しく働く姿を見て、子どもが育つということもあります。

私達はまだ、子育てについて具体的な提案ができる段階には至っていません。しかし今の段階で言えることは、「良い父親・母親像、祖父母や地域の大人像」に定形はなく、「違い」も尊重されて然るべきだということです。これは子育てに限ったことではないかもしれませんが、「違い」についての理解、認識の不足、理解できているつもりで理解できていないということへの認識の不足こそが、「ずれ」を生じさせるもととなっているのではないのでしょうか。

「親が変われば子どもも変わる」が本当なら、「子どもが変われば親も変わる」ということもできるでしょう。親自身による子育てを支えながらも、より多くの人々が地域の子育てに関わりながら、子ども達を元気にすることで、親も元気にするための努力も必要なのではないのでしょうか。

今回、聞かれた声の中に、「公園が広すぎて、かえって顔なじみができにくい」「公園に行っても誰もいなくてつまらない」というものがありました。安全確保のため遊具の利用が禁止された結果、人が遠のき、草が生え茂った公園も目にします。しかしその一方で、地域に暮らす人々の力を生かすことで大勢の人々が集うようになった公園もあります。

今回の事業を通じて、私達は「いばらき」の可能性も感じることができました。「いばらき」にも、素晴らしい活動をすでに開始されている方々、自らもアクションを起こしたいという強い思いをもっている方々がたくさんいらっしゃいます。

次年度以降は、これまでの成果をもとに、「何ができるかを市民目線で話し合う」機会を設け、当初の目的である「みんなで考える いばらき教育プラン」の具現化につなげたいと考えます。

ヒアリングで聞かれた「いじめが不安」という声に対しては、「みんなで考える」ための場を設けるためにすでに具体的な計画を進めています。誰かに何かをしてもらうのを待つのではなく、一人ひとりがより主体的に子育てに関われるようにすること、たとえ一人ひとり立派ではなくとも、力は小さかったとしても、それぞれの立場から自分に何ができるかを考え、それが実践できる環境づくりこそが必要なのではないかと考えます。

ヒアリングやトークカフェについては、対象を未就学児だけでなく小学生の保護者にも広げ、継続したいと考えています。既参加者には、ヒアリングへの聞き役としての協力や、「子育てどう(Do)？」トークカフェの広報への協力を得るなど、これまでのつながりを大切にしながら、参加・活動の輪を広げる所存です。

また、母親サークルや地域で子育て支援に取り組む団体、新たに活動を始めようとしている団体とも協働し、情報発信やトークカフェの共同開催などを通じて、各地域における子育て・子育て環境の充実に努めたいと考えています。

最後に改めて、貴重なご助言をいただいたアドバイザーのお二人、ヒアリングにご協力いただいた皆様、情報発信にご協力いただいた皆様、そして助成をいただいた「生活協同組合パルシステム茨城」の皆様、その他様々な形でご協力をいただいた皆様に、スタッフ一同、心からのお礼を申し上げます。

2013年8月

子育てどう (Do) ?プロジェクト運営委員会

松井 由佳・小野村 哲

## 子育てどう (Do) ?プロジェクト ～「子育てどう？」から広げる 共感と協働の輪～

企画・運営 : 子育てどう (Do) ?プロジェクト運営委員会

小野村 哲 ( 認定特定非営利活動法人 リヴォルヴ学校教育研究所 )  
松井 由佳 ( 認定特定非営利活動法人 リヴォルヴ学校教育研究所 )  
北村 直子 ( 認定特定非営利活動法人 リヴォルヴ学校教育研究所 )  
椎名 千春 ( 認定特定非営利活動法人 リヴォルヴ学校教育研究所 )  
大嶋 愛子 ( 認定特定非営利活動法人 リヴォルヴ学校教育研究所 )

アドバイザー

池田 幸也 ( 常磐大学 教授 )  
横須賀 聡子 ( 認定特定非営利活動法人 水戸こどもの劇場 )

協力 : 認定特定非営利活動法人 水戸こどもの劇場  
ママとベビーの輪 代表 岡嶋 奈美子  
産前・産後ケアサロン「ら・くな」院長 前島 朋子  
美浦ファミリーサポートセンター サポーター 佐藤 十枝  
特定非営利活動法人ポレポレ 事務局長 神谷 尚世  
茨城大学教育学部情報文化課程3年 小野村 季子  
藤平 理恵

活動報告対象期間 : 平成24年10月～平成25年8月

発行日 : 2013年8月30日

連絡先 : 認定特定非営利活動法人リヴォルヴ学校教育研究所  
〒305-0051 茨城県つくば市二の宮4-3-2 二の宮コーポC101  
TEL 029-856-8143 FAX 029-896-4035  
E-mail rise@cure.ocn.ne.jp  
URL [http://rise.gr.jp/net/kosodate\\_do](http://rise.gr.jp/net/kosodate_do)